

あめりか物語

映画文学人生論

永井荷風 (1879-1959)

『あめりか物語』(1908) 「博文館」

『ふらんす物語』(1909) 「博文館」

『地獄の花』(1902) 「金港堂」

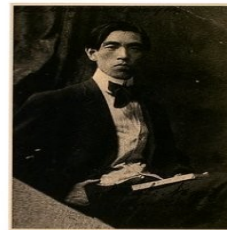
『断腸亭日乗』(1980-81) 「岩波文庫」

アメリカの木の葉ほど秋にもろいものはあるまい

『あめりか物語』は、永井荷風が明治三十六年(1903)の秋十月の頃より明治四十年夏まで米国に滞在した体験を題材にした二十篇あまりの短編小説集。そのうちの「おち葉」から引用してみる。

アメリカの木の葉ほど秋にもろいものはあるまい。九月の午過ぎの堪えがたいほど暑く、人はまだ夏が去り切らぬのかと啣っている中、その夜ふけ、露の重さに、檜や榊や、菩提樹や、殊に碧桐のような楓樹の大きな葉は、夏のままなるその色さえ変えずして、風もないのに、ぱたり、ぱたりと、重そうに、瀬気に落ち散る。自分は、四辺がすっかり秋らしくなって、朝夕の身にしむ風に、枯れ黄ばんで、雨の如く飛ぶ落葉を見るよりも、如何に深い物哀れに打たれるのである。訳もなく、早熟した天才の滅びるのを見るような気がする。

秋の季節に託した作者の気分が伝わってくる文章だが、野暮を承知で理屈をいうと、秋の木の葉がもろいと感じるためには、なにもアメリカまで行くことはない。日本にいても感じるはずだ。彼が異国に身を置いたのは、早熟した天才の滅びる気分にはたいたいだけのこともかもしれない。



あめりか物語

映画文学人生論

彼は夕暮れに一人、セントラル・パークの池のほとりを一廻りし、シェークスピアをはじめ、スコットやバーンズなどの銅像の並んでいる広い並木道に出て、ベンチに腰をおろした。

ヴェルレーヌの「秋の歌」を思いだす。

Les sanglots longs

Des violons

De l'autonne 「秋の胡弓の咽び泣く」

ボードレールの言葉をつぶやく。「酔う。これが唯一の問題である。人の肩を圧えて、地に屈ませようとする『時』という恐ろしい荷の重さを感じまいとすれば、人は躊躇する事なく酔っていねばならぬ。酒、詩、徳、何でもよい」。

ヴェルレーヌやボードレールはフランスの詩人だが、荷風はアメリカにしながらフランスにあこがれ、娼婦とつきあいながら、美しい中にもなお美しい女とのロマンチックな恋を夢想した。

しかし、十月も末近き或る夜の事、彼は酔っ払いの日本人労働者が恐ろしい巡査に引き摺られて行く姿を目撃した。当時すでにアメリカでは日系人の移民を排斥する運動が盛んになり、日米戦争に発展する機運が醸成されている。やがて空襲で家を焼かれ、逃げ惑う運命が荷風を待っていた。

ほろび行く国の日永や藤の花

荷風